

せて取りに来て下さい」と

云ひましたら、皆んなが

「ヤツバリ岡本先生やつた」とホツとしたやうにどよめいて來ました。

そして順を追ふて袋のおもちやは皆出されてしまひました。

封じた箱の中のおもちやは何であるかは分らぬ丈それ丈子供は中が見たさに、

「何やらか早う見たいな」とためつすがめつしてゐる姿、

「あなたのは小さいな私の大きな箱や」

なんてあつちのすみこつちの角の方で三々五々頭を集めて中をのぞき込むあどけなさ保姆もみな其の境に引き入れられて笑みこぼれてゐた、こうして最終の日はさよならを

げた。

此の園の兒供達は常に三圓や五圓位の玩具を與られてゐる幸福な家庭の子女であるが、かうした園の贈物は高の知れた二三十錢のつまらぬ玩具である。それがどれ丈幾倍か子供のよろこびに價するであらうかを思はせられる、其の品が子供の満足をかふに價値ないものであつても、其のあそびの間其の封じたものを開く迄での子供のよろこびに満ちた好奇心それを持ち歸つて家庭に於ける語り草、其印象何れも私共の望ましい事ではあるまいか、かうしたあそびの中に保姆と子供とは心の接近、互の心のよろこびの共通など考へさせられるものではあるまいかと思ひました。

新春のどかな日門に羽根つく音を聞きつゝ記す。

## 『兼 ち や ん』

東京女子高等師範學校教授

岡 田 美 津

## 第一豆板

「母ちゃん! 母ちゃん!」と兼ちゃんはいつた。

田村の一家が立花町の通りをぶら／＼歩き始めてから之で二十三度目だったのだ。

「何だよ、兼ちゃん」と母はすこし、うるささうに言った。

「母ちゃん、こゝにお菓子屋があるよ。」

「それがどうしたの。飴チョコあした上げるからね。」

「いま欲しいんだ。」

「待たなくつちや駄目。お前林檎を二つ食べておまけにお饅頭まで食べておいて飴チョコが欲しいなんてあんまりぢやないか。」

「あたしまだお腹がへつてる。」

母は之が可笑しかつたと見えて笑ひ出してしまひ、先へ立つて女の兒を抱いて歩いてゐる大きな男に聲をかけて、

「おまいさん。兼公がお腹がへつてるんだとサ。」と言つた。

その男は立ち停つて可笑しさうな眼をして倅に向つて、

「お腹がへつてるのか、兼公? ポツタラ焼が欲しいんだ

ら。」

兼公は怒つたやうな顔をした。母は

「そうぢやないヨ。菓子屋を見たらお腹がへつたんだと。

明日の朝でなくつちや飴チョコはやらないツて今いつたのさ。」

「母ちゃんのいふ事分つたらう。ン、兼公。」と父はいつてこんどは家内に

「オイお芳。来いよ。ちよいと口へ入る甘いもの買つてやらう。」

「ほんとにお前さんはこの子に甘くてしょうがない。」

といひながらそれでも性の良ささうな笑顔をしてお菓子屋の窓の方へ寄つていつて、

「いゝかへ、飴ン棒だよ。氣取つたものを食べさせてお腹

をふくれさせちやならないから。お前さんいゝかい飴ン棒を買つてね、千代ちゃんも一かけ貰はうね、坊や。」と夫の腕に抱かれてゐる女の兒に愛しさに訊いた。千代ちゃん

は母だけに解ることばで嬉しいといふ心持を示した。

「あたゝい豆板が欲しい。と兼ちゃんは父にかすれた聲でい

つた。店の窓に並べてある美味しいものを見て聲が唄れる程に情がせまつたのだつた。

母にはきかせない積りだつたのにちやんと聞かれてしまつて、

「豆板だつて！ 豆板なんか食べる子供はあとで油薬を飲まされるんだと母はいひ放つた。

兼公の下唇は突き出て、泣き出しさうに慄へてゐた。夫の吉藏は妻に、

「それや、お前はあと／＼の事を考へてるんだ、がちいさい豆板の一枚ぐらゐ毒になりやしないよ。大丈夫だ。お前だつて少しや食べたいの分つてらア。」

「それやいゝけれどネ、だけど、お前さんお醫者が何といひなすつたへ、ソラお前さんが博覽會へ兼公を連れていつたあとであの子が煩らつたときさ。お前さん忘れやしまし。兼公は胃が弱いから食べものに氣をつけなくつちやいけないつて。それにこの間の晩新聞でよんだが、南京豆位消化のわるいものはないんだつて、豆板には一杯南京豆が入つてゐるから。」

「そうだな」と夫はさすがに家内の道理ある言葉には勝てなくつて「ぢや、飴ん棒にしよう。千代坊を抱いてくれ。」と言つて菓子屋へ入つていつた。

菓子屋から出ると吉藏は「身體からだに障らぬといふ」飴棒を家内に渡した。家内は早速千代ちやんとと飴ん棒の短かいのを取出して、紙袋を割いてその一方をくるんであてがつた。兼公は沈んだ顔をして黙つて自分の分を買つた。やがて一行はまた歩き出した。吉藏は千代坊を抱いてゐるのだが、坊やお父つちやんに食べさせるんだとて飴棒のペタ／＼になつた方を時々父の顔に叩きつけた。

およそ五六間も行くとお芳が大きな店の前で一同を立止らせた。

「おまいさん、私ちよいとこへ寄るから。千代坊の着物にする紅い「ネル」を買はうとおもふの。」

「お前のものは何もいらぬのか。」  
お芳は飾り窓の中の或る品物をつく／＼と眺めて居たが「すい分高價たかいね。」と呟いた。

「そう高くもあるまい」と吉藏も考へ／＼いつた。

「とにかく地質はいゝんだがね。でも無くてもすむものにそんなにお金を出すのはいやだから。それに兼公に新しい帽子を買つてやらなくちゃならない。」

「あいつの帽子はあれで結構だ。お前そこへ入つていつて欲しいと思つたものを買つて来いよ。帽子の事はあとでまたどうにかならあ。お前だつて人並に正月をしなくちゃ。さ早くいつて来いよ。」

お芳はいそ〜として、

「私千代坊を抱いて行かう。お前さんそう長く抱いて居ちや腕が痛くなつちまふよ。だん〜この子も大きくなるから……ね、そうだね坊や。」

と言ひながら店へ一歩入つてまた一寸あと戻りして、

「おまいさん、兼公をよく見張つてよ下さいよ。」

「あゝ承知だ！ お前が出てくるまでおら兼公と二人でぶら〜そこらを歩いてゐるよ。」

吉藏は坊やの御愛想の飴のベタ〜を顔から拭き取り、スパリ〜と満足らしく煙草を吸つて俵の方へ手を出し、  
「さおいで 公。」といつた。

ちやん

兼ちやんはちいさな握り拳こぶしを父の大きな手に入れ、二人で賑を通りをぶらり〜と歩いた。そして往來や店の窓に珍らしきものがある度に立停つた。兼公は返事の出来ないやうな問を數知れずかけた。

質問の途絶えた暇に、父親は、

「おまい、飴ん棒を食べてしまつたのか。」ときいた。

「んたべちやつた……豆板みたやうにうまくないよ、お父つちやん。」

「今豆板が欲しいんぢやあるまい？」

「豆板はうまいね。」と父の顔を見上げながら、用心ぶかくいひ出した。「初ちやんとこのお父つちやんは、時々初ちやんに豆板くれるよ。」

「でもナ兼坊、お父つちやんはおまへに豆板はやらないよ……だがナ、お父つちやんのかくしに手をいれて見な、ひよつとすると……母アちやんにいふんぢやないよいか。」

兼公は狂氣の體で早速手を突込んだかとおもふと、もう口をもぐ〜動かし出した。

「この野郎、袋を破いちまつたナ。」と父はかくしの中を探

りながら「これで明日の朝までもうやらないぞ。お前が南京豆をたべたのがお母さんに知れるとお父つちやんが怒られるからナ。」

「あたい言はないよ。」と兼公は寛大な態度で答へた。

二人はさつきの店の前へ戻ると吉藏は俸の口のはたをよく拭いてやり、しきりに何食はぬ顔をしようと努めたが、うまくゆかなかつた。

しかし店から出たお芳は嬉しいのと得意なのとで何も勦付かなかつた。

「千代坊をおらにおよこし。」

「いよよ、いよよ、私が少し抱いて行くから。店で腰をかけてゐたから。ちやこの包を頼まう。かくしに入るかも知れない。」

「丁度入る。」と夫はほそ長い紙包を押込みながら、

「氣に入つたのがあつたから。」

「おまいさん、私や二十錢程値切つてやつたの。」

「なか／＼抜目のない女だナ。さこれから蠟細工の人形を見に行かう。」

「お父つちやん、あたい死んだら蠟細工にしておくれネ。」と兼公が横合から口を出した

「これ、なんです。」とお芳はいつて、

「おまいさん、この子がこんな事いつたら、小言をいはなくちやいけないよ。」

「あゝ、この子は賢いナ……おい兼公、もうそんな事いふんぢやないよ。」と眞面目ぶつて言ひ足した。

兼公はたいして閉口もせず、

「どうして人が蠟細工になんかなるの。」ときゝ出した。

「ひとに見せるためさ。」

「でも、どうして……」

兼公の質問は中止になつてしまつた。汽車にと急いで歩いて來た男の荷物に兼ちやんがいやといふ程突當つてしまつたのだ。

「そらごらん、ちやんと彼方あちちを見て歩かないからサ。」と母はいつた。「おまいさん、兼公の帽子を眞直にしておやりよ……可哀さうにお前痛かつたらう」と優しくつけ足した

「あたい泣かないよ。」と兼公は袖口で眼を拭き／＼慄へ聲

でいつた。

「偉いネ、お前は」と母親は言つた。

「よし／＼兼坊。ぢきに大人になるからな。」と父親がいつた。

かう慰められて兼公は親達についてトコ／＼歩いていつた。その内に蠟人形の見世物の派手／＼しい入口に來た。

「さ、こんだおれが千代坊を抱かう。」と吉藏がいつた。

「あいよ、入るにはその方が都合がいい。そして私、その包を貰はう、お前さん邪魔になるだらうから。」

といひながらお芳は子供を夫に渡した。そしてそのかくしから包を引出すと、いやはや、豆板の破片（たがひ）がそれに一杯くつ付いて來て、敷石の上に落ちた。

吉藏は抱いてゐるのが赤坊でなくばその場に取落してしまつたかも知れなかつた。兼公は足許の菓子をぢつと眺めて居たが思ひきつて拾ひもしなかつた。お芳は怖い顔をして夫と俣の顔を見てゐた。實際このまゝ蠟人形に作つていゝ程の活人畫だつた。

だが、子供の考いとても大人には想像がつかぬもので……

……兼公は涙を双の目に浮べて怖る怖る母の顔を見上げ、

「お父つちやんは一つも食べやしないよ。」と咬いた。

お芳の顔は驚きの表情に變つた。

「何だつて。」

「お父……お父つちやんは一つも食べやしないよ。」と兼ちやんは繰返していつた。

こんどはお芳が急に可笑しさうな顔をして、

「ほんとにお前たちは對の子供さね。」といつて思はず笑ひ出してしまつた。

「おれが悪るかつた！」と吉藏はいつた。

「おまいさん、そつちのかくしへ豆板をいれて置けばよかつたのに……およし／＼兼ちやん拾ふんぢやないの。」

と兼公が屈んでつまみ上げさうにするので制した。

泥がついてやしないよ、母ちやん。」

「でも泥の上だからね、おいで！」

兼公は曳ばられて蠟人形を見にいつた。

父親は俣に眼くばせをして、も一方のかくしをこつそり指して見せた。がそれや何故だろう。(第一の終)

## 第二 動物園

田村家の親子四人が山下町から白川町の通りへ出て來ると、兼ちやんは、

「お父つちやん、なぜ動物園つていふの。」と言つた。

「さあ、何故だかなア。」と父親は答へて、それから家内に對つて、

「お芳。兼坊がなぜ動物園といふんだとよ。」

お芳は、

「兼公はそいつつてきくが、動物園ていはなけれや、ぢや何ていふのさ。」

「ん、それもさうだな。」と吉藏は受けて、

「だが動物なんて妙な言葉だな。考へれば考へる程變だ。

いつだつたかも……」

「お父つちやん。彼處そこもうぢきななの。」と兼公は尋ねた。この子の言語學習的智識欲は盛んでもなく永續性もなかつたと見える。

「あゝ、もうすぐそこだ。お芳、動物を見に千代坊を連れ

てほんとにいゝかね。怖がりやしまいか。」

「怖がる？ そんな氣遣はないよ。この子はめつたに怖がりやしない。水曜日すいようびに牧師様きしやうがうちへ見えた時だつて千代坊はちつとも怖がらなかつた……ねい坊や。牧師様の顔を見て笑つてね、牧師様の眼をおもちやで突つかうとしたり何かしたんだよ。それで牧師様も可笑しがつて、ご自分の咬止め銚劑くさしを一つ坊やに下すつたの。どうしてこの子はめつたに怖がりやしない。」

「おまへがそういふなら確だ。千代坊をおれにおよこし。」  
「中へはいるまで私が抱いてるよ。もうぢきにひとりで歩おん行いするようになるね坊や。おまいさん兼坊の手を曳ひいて、下さいよ。飛び出していつて馬車ばしやに轢ひかれたり迷子まよこになつたりしさうだから。」

「お父つちやん、動物園が見えて來たよ。」と兼公が云つた。

「あ、あれがそうだ。お前動物を見るの始めてだらうエ、兼坊。」

「見世物で見た事あるよ。」

「さう。原田の叔母おばさんとこに泊つてゐた時だつた。」

叔母さんは動物の居るところへ行くの怖がつたらう。」

「原田の叔母さん大馬鹿だ！」と兼公がいふと、母親はすぐそれを遮つて、

「何です！ 何です！ 原田の叔母さんのことをそんな事いふもんじゃない！ ちゃんとした立派な人なのに……おまいさん兼公の言ふ事を笑つたりしちやいけないよ。兼公がいゝ氣になつて仕様があまりやしない。」

「この子は賢いものな。さこゝで向ふ側へ渡らう。」

「何故ね……」と兼公がまたやり出した。

「兼坊、お父つちやんに手を曳いておもらひ。電車に轢かれると困るからね。」

一同無事に向側へ渡り、親子は動物園へ入つた。二三分の間は入口に立停つて、どつちの方へ行かうかと迷つてゐた。すると掛りの人が大聲で今これから獅子と虎の藝が動物園の健物の西側で始まると觸れて歩いたので吉藏の一まきは群衆と一所になつて、そつちへと急いだ……兼公は、この時ばかりは夢中になつて物もいはずにつゞいていつた。

猛獸を使ふ男が、怖れる氣色もなく立派に獅子や虎を使

ひこなすので見物してゐた田村の一行は感歎の聲を出すだけ

けで話など一向にしなかつた。兼公はその間中父の手を放さうとの氣振りもしなかつた。藝が濟んでしまふとお芳は

「ほんとにまあ！ 感心なもんだね。」と叫んだ。

「まつたく素晴らしいや。」と吉藏はお芳から千代坊を受取りながら言つた。

すると兼公がちいさな聲で父親の傍で、

「お父つちやん、あたひ怖くなかつたよ」とかすれ／＼にいつた。

「おい、兼公は怖くなかつたんだとよ。」と吉藏が家内に傳へる。

「さうかも知れない。」とお芳は答へて「だがね、でつかい獸があつた男のまはりを飛びまはつた時なんか、私やまつたく慄へちまつたよ。あんな獸が檻を破つて出て来て、そこいらの人の頭や脚をもぎ取つたりし出したら、私や千代坊を連れて、どうしようかしらと考へたよ。」

「そんな心配はいらねえこつた。」

兼公は急に氣が強くなつて、



「もし獸があたいの首をもぎ取りさうにしたら、あたひ、あの……………あの……………蹴飛ばしてやらあ。」

「男だものな、偉いや。」と父親がいふと、

「おまいさん、この子にそんな自慢をさせちやいけないよ。」とおが芳咎める。

吉藏はにや／＼しながら、

「兼坊、もし獸が母ちゃんを追掛けて來たら、おまい、どうする。」

「あたひ……………あの……………尻尾しつぽを引張つてやる。それから……………あの……………」と剛勇な兼公が言ひ出した。その途端に獅子が吼え立てたので彼は急に口をつぐんで、父親にすがり付いてしまった。

お芳は、

「兼公、お前は自分だけ逃げて、母ちゃんを置去りにして獸に食はしちまふだらう。」ときくと、

兼公は下唇を慄はして、

「あたひ、そんな事しないよ。」と眞面目に答へた。

「そうかい、坊や。」とお芳の聲は自然と優しくなつて「さ、

さ、もうこんな話はよさう。お父つちやんと千代ちやんは何を見にゆくんだらう。」

「象だよ。」と兼公がいつた。吉藏と千代ちやんが剝製にした大きな象の前に立つて眺め入つてゐるとこへ、お芳と兼公は追ついたのである。

「これは生きちやゐねいんだ。ついでか銃殺する事になつた奴なんだ。」と吉藏が説明した。

「何故銃殺されたの、お父つちやん。」

「險吞だから。」

「なぜ險吞なの。」

「お父つちやんもよく知らねいが、他の話わにその象が番人を踏みにじつたり、人のかぶつてゐ帽子を食べちやつたりしたんだと。」

「お父つちやん、向ふの白い毛むくぢやらの獸なに？」

「向ふのあれか。お芳、お前知つてるか。」

「あの繪を見た事はある。あら、……………あの北極熊つていふんだ。」

「熊か、あれに食はれたら「くま」るナ。全くだ！」と吉

藏は快さうに笑つた。

「全くだ―」と兼公が眞似をする。

「そんな事いふんぢやない。」とお芳がいふ。

「どうして？ 母ちゃん。」

「そんな事いふもんぢやないの。」

「お父つちやんがいふもの。」

「お父つちやんも言つちやいけないの。」

「どうして？ 母ちゃん。」

「さあ、お芳。」と吉藏は今買つて来た目錄を家内に渡して

「これを見ると動物の名が分るぜ。あれあ何ていふもんだ

……向ふの稿のある……あの、斑點（ぼんてん）のあるあれは？」

「どつちもヒエナだと。」お芳は檻の番號と目錄と照らし合

せて「恐ろしい爪のある大きな黒い奴、あれが印度の黒熊。」

「黒熊か。檻に入れられて居ては「苦勞」熊だな。」と吉藏

は高聲に笑つた。

「まあ。おまいさん、今日は大變洒落がうまいね。……あ

ら、兼公はどこへ行つたらう。」

あちこち探すと兼坊は建物の裏側で、二頭の駱駝に怖る

く見入つてゐたが、

「お父つちやん、ちいさい方の駱駝の顔ね、原田の叔母さんに似てるよ。」と言ひ出した。

父親はアハアハ笑つた。

母親は澁い顔をして、

「おまいさん、私がいつでもいふぢやありませんか、兼公が生（なま）いきな事をいつたときに笑つちやいけないつて。おまへさんにも呆れるよ。」

「だつて。今なんぞ笑はずに居られるもんか。全くだ。おれだつて、おまいの兄さんの内儀（うちぎ）さんによく似てると思つたんだから。」

「まあ！」

「ほんとだよ。雨の日曜にあの人が教會から出て來るとき顔そつくりだぜ。」

「あゝいふに生れついたんだもの、しかたがありやしなさい」

「おれにあさつばり解らないよ。お前の兄さんがお前のやうな綺標（はなご）よしの妹があるくせに、あんな婆（ばあ）の化物を家内に貰ふなんて。」

「フーン、おまいさん今日は、よつほどどうかしてゐる。」とお芳は微笑を無理に抑へていつた。

「お父つちやん、何故、駱駝は象みたやうな鼻がないの。」  
「兼坊」と母親は「おまいに遇つちや惠智の神様だつてやりきれない。ちよいとあの背中の瘤をごらん。そして、そうしつこく……」

「お父つちやん、何故駱駝に瘤があるの。」

「お前はおもしろい子だ。瘤があるのは鼻がないせいだろ。……さ、一錢やるから向ふの店へいつて獸にやるパンを買つといで。」

兼公はやがて戻つて来て、

「あたい象に之やるの。」と宣言した。

「それがいゝ〜。そら大きい奴が鼻をつき出して……  
……どうだ、パン一個ぐらゐ何の足にもしならない風だな。  
パンを一つ千代ちやんにやつてもう一疋に食べさせてやつたら。」

「象の鼻は人の鼻と同じなの。」と兼公が尋ねた。

「同じだとも。」

「何故人は鼻でものをつまみ上げないの。エ、お父つちやん。」

「まあ黙つておいで、兼坊。」と母親は制して「おまいさん千代坊を連れて行つて鸚鵡を見せてやつて下さいな。」

いろ〜の鳥をさん〜眺めたり評をしてしまつて気がつくとき兼ちやんの姿がまた見えなくなつてゐた。探しあてるとこんどは彼は大勢の猿にむかつて滑稽な顔をして見てゐた。

「猿なんかオーいやだ、こつちへお出で。私や猿は大嫌ひ。水ん中にゐるあの獸は何だらう。」とお芳は言つた。

「百二十九番つていふ奴だ。」

「あゝ、海豹ホシ。獨逸の海で捕つたのだと。これやちいさい方だね。向ふの大きのがカリフルニアのだとさ。兼公あれ海豹だよ。」

「どうして足に毛がないの。」

「あれあ足ぢやないよ。鰭ひよといふもの。」

「どうして鰭に毛がないの。」

「鰭に毛があると泳げないんだらう。」

「どうして毛があると泳げないの。」

「こつちへ来てこの珍らしい獸をごらん兼坊。」と母親はいつた「印刷物には獾ぎくとしてある。」

「どうして獾ぎくつていふの。」

「パンを一つかけやつてごらん。」と母はごまかした。「かあさうにね、おまいさん何だかこの獸はべそかいてるようだね。」

「そうだな。おれだつてあんな鼻だつたらべそかくな。兼坊氣を付けて指を噛かまれなさんな。」

「どうしてあれの鼻あんなにぐら／＼してるの。エ、お父つちやん。」

「兼坊。あいつお前を見てるやうたぜ。もう一つパンがほしいつて鼻をゆすぶつてるんだらう。」

「ちよいと、おまいさん、私千代坊とすこし腰をかけて休むよ。」

「くたびれたらう。茶でも飲のまうか。」

「お茶なんか欲ほしくないよ。」

「欲ほしくなくつても飲のむ時もある。さあいで。」

兼 ち や ん

お芳は首を振つて無駄な事だとか何とか呟つぶやいてゐた。

「おら……おら今日給料が上がつたんだぜ。」と吉藏が出しぬけに言つた。

「あら、さう？」

「あゝ、五十錢。」

「おまいさんが今日あんまり洒落をいつたりなんかするから、何か譯があるんだと實は思つたけれど。」とお芳も笑つた。

「さ、来いよ、さ、兼坊。」

「お父つちやん、どうして……」

「動物をまたぢきに見に来ようね。お前、パイを食ふか。」兼公は長い息をして、

「食ふとも！」といつて顔をにこ／＼させる。

(第二の終り)